

昭和五十二年度 陵墓関係調査概要

陵墓調査室

昭和五十二年度は陵墓の營繕、大和高田市の道路改修、国土地理院の骨格測量等の工事のため、施工区域内の陵墓の遺構・遺物・埋蔵文化財等について、次のように事前調査及び立会調査を実施した。

(事前調査・立会調査)

一、後宇多天皇陵（京都市右京区北嵯峨朝原山町）整備区域の調査

担当 笠野毅・井上喜久男・表野保治・北田健郎

二、鳥戸野陵（京都市東山区今熊野泉山町）外構柵設置区域の調査

担当 井上喜久男・茶谷尚三・鎌田恒雄・辻井忠則

三、繼体天皇陵（大阪府茨木市太田三丁目）外構柵設置区域の調査

担当 戸原純一・南智次郎・畠隆夫

四、景行天皇陵（奈良県天理市渋谷町）渡土堤改修区域の調査

担当 笠野毅・井上喜久男・表野保治・西村義輝・前川勲・松岡和男

・坂口勝紀

五、磐園陵墓参考地（奈良県大和高田市大字築山）外堤隣接市道の護岸

担当 芳村章雄・小走公典

設置区域の調査

六、畝傍陵墓監区事務所（奈良県橿原市大字洞）水道管埋設工事箇所の調査

担当 笠野毅・井上喜久男・表野保治・北田健郎

七、伏見桃山東陵（京都市伏見区桃山町古城山）崖地擁壁設置工事箇所の調査

担当 西村義輝・森本正哲・西川広貞・平木由喜久

八、仁德天皇陵（大阪府堺市大仙町）西側渡土堤漏水防止工事箇所の調査

担当 浅野良文・西野正治

九、飯豊天皇陵（奈良県北葛城郡新庄町大字北花内）北側金網柵設置工事箇所の調査

担当 芳村章雄・小走公典

一〇、大塚陵墓参考地（大阪府羽曳野市南恵我之荘七丁目）後円部三等三
角点観測櫓仮設工事箇所の調査

担当 堀内朝保・真銅慶一

一一、允恭天皇陵（大阪府藤井寺市国府一丁目）外構柵の支柱新設工事箇
所の調査

担当 真銅慶一

一二、円融天皇陵（京都市右京区宇多野福王子町）電灯線埋設工事箇所の
調査

担当 南智次郎・中川幸延

一三、土御門天皇火葬塚（徳島県鳴門市大麻町池の谷字大石）堀浚渫工事
箇所の調査

担当 堀内朝保・日野輝明

一四、近衛天皇陵（京都市伏見区竹田内畠町）避雷針接地線埋設替工事箇
所の調査

担当 奥田佳久

一五、仲津山陵見張所（大阪府藤井寺市沢田四丁目）水道管理設工事箇所
の調査

担当 真銅慶一

一六、仁賢天皇陵（大阪府藤井寺市青山三丁目）堀入水口改修工事箇所の
調査

担当 大平齊

一七、景行天皇陵（奈良県天理市渋谷町）陵前一般拝所埋設水路改修工事
箇所の調査

担当 坂口勝紀・松岡和男

一八、五十瓊敷入彦命墓陪冢ろ号（大阪府泉南郡岬町淡輪）土留柵設置工
事箇所の調査

担当 堀内朝保・浅野良文

（その他の調査）

一九、後宇多天皇陵内石仏安置所新設工事に伴う石仏の調査

担当 石田茂輔・市野千鶴子・蔽秀雄・中川幸延・高田慶昭・長浜敏
男

二〇、桃山陵墓地（京都市伏見区桃山町三河一の三）内で発見された旧伏
見城石垣の実測調査

担当 南智次郎・北村素一

二一、欽明天皇陵（奈良県明日香村大字平田）外堤工事区域の地形現状測
量調査

以上の調査は、事前調査は当部陵墓調査室員と、所管陵墓監区職員が
これに当り、立会調査は、陵墓調査室の指示により、所管陵墓監区職員
がこれを行い、工事の設計と実施は、以上の調査結果に従い京都事務所
工務課がこれにあたった。

なお、前記調査のうち、四の調査については、考古学上の指導を権原
考古学研究所長末永雅雄・奈良国立文化財研究所長坪井清足両氏に、地

質学上の指導を奈良教育大学教授梅田甲子郎氏に、工法及び基本設計の指導を建設省土木研究所砂防部長吉岡良朗氏にそれぞれ依頼した。また、三の調査については徳島県教育委員会主事立花博氏に立会を依頼し、同県教委職員と鳴門市教委職員の協力を得た。出土品の鑑定については、名古屋大学助教授樋崎彰一氏に指導を依頼した。

以上の調査のうち一から六の調査について以下その概要を記載する。

一、後宇多天皇陵整備区域の調査

整備工事の実施にあたり、昭和五十二年八月一日から十四日までの間事前調査を行った。調査箇所は、本陵南側及び飛地「ほ号」、「ろ号」の外構柵設置箇所、陵前の駐車場用地及び排水溝脇石積修補箇所である。陵域内には朝原山古墳群の円墳11基が存在するため、外構柵設置箇所を中心に入小25箇所のトレンチ（第1図）を設定して調査を行った。

第1トレンチ（第2図） 大別してI～VI層が認められ、I・II層は変化のない堆積土層である。III層は細かく四層に分れるが、IV層を掘り込んだ状態である。IV層はV層にピット状に掘り込みがあり、V層は黒褐色土層で小木炭塊を含み、層も厚く性格が不明である。またVI層は黒褐色の礫層であり地山と考えられる。

第2トレンチ（第2図） 陵域西側の境界線に沿って土堤状の高まりがあり、これが南側境界線沿いの市道により切り取られ、道路際に断面

を見ていた。断面の土層はI～IV層に分けられ、I～III層は盛土層、IV層は黒褐色を呈し、旧表土層と考えられる。出土遺物が全くなく、盛土の年代は不明である。

第3トレンチ（第2図） 地山層まで大別して二層に分れ、I層は表土腐植土層を含む褐色粘質土の盛土層であり、II層は黒褐色粘質土で旧表土層と考えられる。地山層は灰褐色の砂礫土層である。

第4トレンチ（第2図） 第2トレンチ箇所と同様に南北に土堤状に

盛土されたと考えられる箇所であり、市道により切り取られ断面が露出していた。土堤状の盛土は厚さ約一メートル、幅は約五・五メートルとなり、両端の裾部のうち西端部分は一部削除され、黄褐色土が埋土されている。また盛土の下層は黒色土層となり、旧表土層と考えられる。

第5トレンチ（第2図） 山麓を削平して南へ平坦に造成し、山寄りに側溝があぐり、現在でも谷川の流水路となつているところである。トレンチは流水路から山寄りの箇所に設定した。土層は四層に分れる。I

層は表土層で竹林のため竹根がよく張っている。II層は礫が混入した茶褐色の土層で広く分布するものと考えられる。III層は青灰色の厚さ二〇～三〇センチの粘土層となる。その上面には約二〇センチ大的の石が数個検出された。さらにその下層は南側の半分が一五センチほど落ち込み、溝状遺構が検出された。遺構内は礫が混入した青灰色粘土層（IV層）となり、有機物が認められ、遺物として瀬戸灰釉碗片、須恵器系擂鉢片、中国製白磁碗片、土師器碗等が出土した。